

まだ何者でもない、そして何者にもなれる皆さんへ

最近、若い方からこんな声をよくお聞きします。

「本当に学位は3年で取得できますか？無駄な回り道はしたくありません」

「研究は好きですが、研究者としてやっていく自信がありません」

「研究はしたいけれど、安定した仕事に就きたいです」

まず正直に申し上げますと、そうした思いのまま研究に臨むのは、精神的に辛いかもしれません。ただ、一度だけ立ち止まって考えてみてほしいのです。**「3年で博士号を取ること」「無駄な回り道をしないこと」**は、本当に皆さんの人生における重要事項でしょうか？例えば、当室では、学生の皆さんが研究に集中できるよう、これまで所属した学生全員に十分な給与を支給し、研究に専念できる環境を整えてきました。また理研・脳センターには Student Counseling Committee—脳センター内の様々な PI と気楽に、そして**守秘義務徹底の元**に相談できる窓口—が設置されており、それは良く機能しているようです。すなわち、**若い人が安心して失敗し、試行錯誤できる環境が整っている**と言えます。理研・脳センターに限らず、どこの組織でも学生・ポスドクサポートの大切さに気付き、真剣な取り組みをはじめています。

ライフサイエンス実験の現場は、成功よりも「失敗」が重なりやすい厳しい世界です。長時間の実験で、こんなに疲れて、何の結果もでない、自分は何をやっているんだと惨めになる日も多くあります。同じ年代の研究者は華々しい成果をあげ、何もかも順調に見えます。眩しくて見ることもできません。一方で、自分は何もできず、何の成果も出せず、結局何もかもが無駄だったと考えたら、声を出して泣いてしまったこともあります。しかしそのような中でも、努めて論理的に考え、沢山のピースの中から正しいものを拾い上げて組み合わせます。大変な作業です。このような暗中模索のなかで、「これは正しいかもしれない」と、微かな光が見える瞬間があります。そちらの方に進むと、それは単なる幻であったことに気付き、再び落ち込みます。しかしそれを繰り返すうちに、光は徐々に強くなり、真実に向けて一步一步と理解が進むのです。はじめはゴミだと思ったデータの山が、ある時に急にピースが組みあがり、真実の輪郭が浮かび上がってきます。その瞬間に得られる高揚感—ドーパミンが迸る興奮—は、この上ない喜びです。騙されたと思ってこの世界に飛び込み、このようなドーパミンの放出を感じて欲しいと思います。

「でも、失敗したらどうするんですか？先生は、既にPI (Principal investigator) になっていますよね。ただの成功者バイアスです。無責任なことを言わないでください。」

ごもつともな疑問です。しかし、私も数え切れないほど失敗を重ねました。今でも定期的到大失敗をし、いい年をしたBBAがギャン泣きしている夜もあります。稀にではなく、まあまあの頻度であります。だからこそ、失敗から学ぶ方法やメンタルの保ち方—そうした“失敗の乗り越え方”を良く知っています。つまり、私や研究室内のシニアの研究者が丁寧に若い人達をコーチングできると考えています。特に最近は思うことも多々あり、若い研究者の卵をサポートすることはシニア研究者の義務であり、そのためにシニアな立場の者こそが努力するべきだと考えるようになりました。

もう一つ付け加えたいことは、研究には必ず「目的と社会的意義」が伴います。あなたが追いかける「生物学的問い」が、誰かの未来を変える一歩になるかもしれません。私たちは単に実験を回すだけでなく、発見を通じて社会に貢献することを大切にしています。特に医学研究はそのような側面が強いです。研究の背景や応用可能性についても、随時ディスカッションしていきましょう。人生は長いですが、近視眼的に考えることは勿体ないと思います。今や、人生100年時代と謳われる恐ろしい時代です。人間は、本気を出せば、幾らでも挽回できると思っています。本当にそう思います。そんなことを考えていると、自然と想起される言葉が私にはあります。中島敦の以下の文です。

「人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短い」

小説「山月記」に登場する日本文学史に残る名句ですので、御存じの方も多いかと思いますが。主人公の李徴が、自分の境遇を嘆きながらも、それを乗り越えようとする姿、自己を否定し、自分の人生を無駄に過ごしていると嘆くものの、それでも何かを成し遂げるために努力し、自分の人生を意味あるものにしようとする願いが表現されています。

しかし、実は、このあまりに有名な文の次に、以下のような文が続くことは比較的知られていないように思います。わたしはむしろこちらに衝撃を受けました。

「人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事實は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだったのだ。」

どのような研究室に行こうが、アカデミアを去ろうが、それは人それぞれです。好きにすれば良いと思います。しかし、まだ何者でもない、そして何者にもなれる皆さんには、口先ばかりの

警句を弄せず、才能の不足を暴露するかも知れないとの無意味な不安におののくことなく、
刻苦を楽しんでほしいと思っています。安全だけれども不本意な日々に身を委ね、心の叫び
を封じるよりも—たと思いい描いた結末が叶わずとも、自らの志を貫いて懸命に歩むほうが、
楽しい人生に思えます。